

O-6-25

ICUへ部署異動した看護師のICU看護の自己評価と精神的エンパワメントの関連

旭川赤十字病院 看護部 ICU・CCU¹⁾、日本赤十字北海道看護大学²⁾○丸長 敬規¹⁾、山本 美紀²⁾

【背景と目的】集中治療室(Intensive Care Unit; 以下ICU)へ部署異動した看護師は、高い専門性を発揮することが求められ、心身のストレスが大きい。新しい領域の専門性を獲得するためには、自己の能力をどう認識しているかといった精神的エンパワメントが関連していると予測された。本研究では、ICUへ部署異動した看護師のICU看護の自己評価と精神的エンパワメントの関連を明らかにすることを目的とした。【方法】研究対象は日本集中治療医学会が専門医研修施設として認定した295施設より、ランダムサンプリング法で100施設を抽出し、調査協力を得た39施設のICUへ部署異動後1〜3年目の看護師205名とした。無記名自記式質問紙による調査を2020年9月〜11月に実施した。研究内容は先行研究を参考に自作したICU看護の自己評価38項目、渡辺ら(2019)が作成した日本語版精神的エンパワメント尺度12項目とした。調査結果はSpearmanの順位相関係数で分析し、有意水準は5%とした。本研究は、日本赤十字北海道看護大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。【結果】対象者205名のうち114名から回答があり(回答率55.6%)、有効回答数は108名であった(有効回答率94.7%)。ICU看護の自己評価と「精神的エンパワメント」では、14項目でかなりの相関が($p=400\sim455$, $p<.01$)、23項目で弱い相関が($p=240\sim394$, $p<.05$)認められた。精神的エンパワメントを高く認識している看護師ほど、ICU看護の自己評価が高かった。【考察】ICU看護の実践を通して、自分自身の看護にどのような意味・価値があるかを認識し、患者や家族、部署にどのような影響があるのか振り返ること、精神的エンパワメントが高くなりICU看護への自信に繋がると考えられる。【結論】精神的エンパワメントを高く認識している看護師ほど、ICU看護の自己評価が高かった。

O-6-27

化学放射線療法を受ける肺癌患者の筋力低下を防ぐための対策

長岡赤十字病院 看護部¹⁾、リハビリテーション課²⁾、呼吸器内科³⁾○佐藤 朝香¹⁾、上村 涼磨¹⁾、桑原香葉子¹⁾、白井 直美¹⁾、諏訪 和彦²⁾、鈴木 雅俊²⁾、佐藤 和弘³⁾

【目的】入院し化学放射線療法を受ける肺がん患者の運動の効果と運動実施上の留意点について示唆を得る。【方法】化学放射線療法を受けた肺がん患者に、ウォーキング、筋力低下予防運動を実施、筋力の変化をとらえた。プログラムの実施状況と副作用症状を記載してもらい、実施前後でアンケートを行った。【結果】期間は2020年10月から2021年3月、参加者は男性3名、40歳代、60歳代、70歳代であり、全員が治療を完了することができた。6項目から成る筋力低下予防運動は、2名が5項目以上を実施、1名は2項目程度、ウォーキングは平均歩数が1日4315歩、2948歩、1863歩と個人差があった。また、時期は異なるが放射線性食道炎を全員が発症し、食事量の低下やプログラム実施に影響がみられた。ウォーキング歩数は、入院直後から徐々に減少し、10日目前後で更に一時減少、その後徐々に増加した。大腿周径などの指標は3名とも変化がなかった。実施後のアンケートでは「筋力を意識ししっかりと行うことは大変。後半怠けがちだった」「自主的だと怠けてやらない」などの意見があった。また、運動を5項目以上実施していた2名は、入院当初から退院後の就労や趣味の継続希望を語っていた。【結論】運動プログラムは体に適度な負荷がかかる内容であり、入院中の筋力低下は予防できた。運動実施は個人差が大きく、退院後の生活をイメージしている患者はプログラム実施項目が多かった。また、放射線性食道炎発症時は一時的に運動実施への影響が見られた。運動継続支援として、副作用予防と発現時の早期対処、病の体験をどのように捉えているかなどを共有し、運動継続へのモチベーションが維持できるような働きかけの必要性が示唆された。

O-6-29

COVID-19 病棟におけるHFNC装着患者のMDRPUIに対する看護師の行動変容

大分赤十字病院 看護部

○鳥居 寛年¹⁾、宍籠 希美、萩 英子

【背景と目的】COVID-19蔓延により当院でもCOVID-19病棟が開設され、入院患者を受け入れている。酸素化不良によりCOVID-19の適応となる患者も多く、2020年11月から2021年7月の入院患者40名のうち、HFNC装着患者は31名であった。そのうち5名にMDRPUIが発生しており、保護材の使用や種類、使用時期に差がみられた。また、発生したMDRPUIについて看護記録がないケースもあった。看護期間でMDRPUIへの意識や実践している看護が異なるのではないかと考え、質問紙調査を実施した。結果を基に、日本褥瘡学会のベストプラクティスや院内の専門家の意見を参考にしたHFNC装着の手順書及びチェックリストを作成し、MDRPUI対策シートとして運用することとした。内容は勉強会等で周知し、2022年1月より運用を開始した。今回、MDRPUI対策シートの有効性や運用開始後の看護師の行動変容を明らかにすることを目的とした質問紙調査を実施した。【研究方法】COVID-19病棟所属の看護師16名に対し、MDRPUI対策シートの有効性、HFNC装着患者のMDRPUIに対する意識や看護に関する質問紙調査を2022年4月に実施し、結果を分析した。【結果及び考察】意識の変化について、全員がMDRPUI対策シートの導入により皮膚観察への意識が「変化した」と回答した。運用前と比較しMDRPUI好発部位を観察する看護師の割合が、自動帯では顔面や人中で増え、夜勤帯では全ての好発部位が増加した。HFNC装着患者に対する看護については、装着部位の保清や保護、患者に対して圧迫除去の指導などをおこなう看護の割合が増加した。またほとんどの看護師が、MDRPUI対策シートが観察や記録などの行動にもつながっていると回答しており、MDRPUI対策シートの有効性を確認することができた。【課題】今後もMDRPUI対策シートの修正・改善を図り、COVID-19病棟だけでなく他病棟でもMDRPUIの予防や早期発見に活用していきたい。

O-6-26

CVポート版IVナース認定制度開始後の10年間の評価と今後の課題

岐阜赤十字病院 看護部

○浅野まゆみ、植村 明美

【はじめに】平成24年にCVポート版IVナース(以後IVナース)認定制度を開始し、10年が経過した。IVナース制導入前は、医師が穿刺を担当していたが、点滴開始時間が遅延することがあり、待ち時間の発生による患者負担や、看護業務の調整に影響が出るなどの課題があり、患者負担軽減と業務改善などを目的にIVナース制を導入した。令和4年2月に看護師を対象に、穿刺回数、穿刺・投与中のトラブル、他部署からの穿刺・相談依頼、IVナース制導入後の看護業務の変化をアンケート調査した。その結果及び課題を報告する。【結果・考察】アンケートは看護師243名を対象とし、226名(回収率93.0%)が回答した。IVナース認定者は看護師経験4年以上の158名(69.9%)であった。IVナース認定後の穿刺未経験者は22名(13.9%)であった。経験者の内、穿刺を失敗した者は42名で、「針が短く再穿刺した」の回答が多かった。「逆血がなく確実に穿刺できているか不安であり再穿刺した」の回答が多かった。他部署から穿刺依頼があった35名は早期に認定を受けた者で、現在は部署を越えての依頼はなくなった。制度導入後の変化について、「IVナースが穿刺するため、速やかに点滴が開始できる(131名)」、「部署内のIVナースに相談できる(86名)」、「医師に穿刺依頼することがなくなった(54名)」、「トラブルの対処方法が理解でき、自己で対応できるようになった(23名)」の意見が多かった。IVナース制導入により、IVナースが穿刺するため待ち時間が短縮し、看護業務の効率化が図れた。また、CVポート管理の質向上にも繋がった。今後は、穿刺経験の少ないIVナースへのフォローアップが課題である。

O-6-28

前立腺全摘除術後患者の尿失禁改善への期待～骨盤底筋運動を実施して～

福岡赤十字病院 看護部

○中野 澁大

【目的】ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術(以下RRARP)を受ける患者の不安は、ほとんどが尿失禁に関連する。患者が尿失禁や骨盤底筋運動を正確に理解・実施し、尿失禁改善への期待獲得までの心理的变化を明らかにする。【方法】RRARPを受けた患者2名(A氏70歳代B氏50歳代)を対象に行った。入院日と膀胱留置カテーテル(以下カテーテル)抜き去り日に骨盤底筋運動の指導を行った。アンケートを事前に渡し、入院日・カテーテル抜き去り日・退院後初回外来日(以下外来日)にアンケート回答を基に10分程度でインタビューを実施した。患者の反応を総括し、尿失禁に関連する不安や尿失禁改善への期待獲得までの心理的变化を比較した。所属病棟の倫理審査委員会の承認後、対象者へ倫理的配慮について紙面にて説明し同意を得た。【成績】入院日、術後合併症として尿失禁があると認知しているが、骨盤底筋運動への理解は浅く「手術の後どんな風になるのかな」など漠然とした不安があった。カテーテル抜き去り日の失禁量はA氏79ml/日、B氏20ml/日であった。退院後も骨盤底筋運動を継続出来ており、尿失禁量は減少傾向であった。外来日では、「入院中に何回も教えてもらえて分りやすかった」、「漏れなくなるまで頑張って続けようと思う」との反応があった。【考察】患者は経験したことのない尿失禁と骨盤底筋運動に対して理解が出来ていなかった事で不安を感じていた。入院時から正しい情報を提供し、退院後の生活について看護師からのアドバイスはあるも、患者が主体的に考えた事で退院後の生活のイメージ化を促進し、日常生活の中に骨盤底筋運動を取り入れた事が出来た。外来日までに戻取りバットの交換回数と失禁量の減少が実感できた事で、今後さらさら失禁量が減少していくと期待でき、骨盤底筋運動継続への動機付けに繋がったと考える。

O-6-30

COVID-19 重症患者における腹臥位療法中の褥瘡発生予防的介入の一考察

旭川赤十字病院 看護部 ICU・CCU

○吉田 萌¹⁾、反橋 陸、山下 美穂、加藤 貴子、中橋 水穂、三上 淳子

【背景・目的】COVID-19重症患者の治療では、長時間の腹臥位療法(以下、腹臥位)が有効であることが示唆されている。従来の呼吸不全に対する腹臥位は約6時間程度であるのに対し、COVID-19重症患者は約17時間以上の腹臥位を実施し、様々な工夫を行い褥瘡発生予防に努めてきた。これまでのICU・CCUでは、腹臥位専用マット1セットで対応できていたが、COVID-19重症患者の入室が増加し、物品準備をする猶予もないまま同時に複数人に対して腹臥位が実施された。そこで、マットの代替品として顔面にはアネプロンマット、体幹にはレストンなどをを用いた自作マットを使用したところ、長時間の圧迫による褥瘡が発生した。今回、人工呼吸器管理下で長時間の腹臥位を行うCOVID-19重症患者の褥瘡発生予防を目的とし、予防的介入について検討し考察したため報告する。【予防的介入の実践】自作マットの高さを調整し、両下肢を開き基底面を広くした。また、皮膚排湿認定看護師等の多職種も介入し、顔面に対し滑り素材やクッション素材のある保護剤を選択した。顔面枕には低反発素材を追加した上で、顔面と体幹のポジショニングを強化した。保護剤の貼り方や除圧方法の手順書を室内に掲示した。【結果・考察】20症例中15症例で褥瘡が発生し、部位別では顔面が多かった。顔面の枕と自作マットから生じる体位のずれが長時間に及ぶことが要因として考えられた。新たに導入した体幹用マットのHOPES SR×two Proneを使用した19、20例目に褥瘡は発生しなかった。マットやポジショニング、除圧方法の改良を重ねることで、顔面の褥瘡を予防するためには体幹が安定し固定できるポジショニングを保持する必要があることが示唆された。